

今月の作品には主観が中心だった現代詩が、他者と共感できるようになっているのを感じました。暑さ寒さの体感や音や味などの五官が大きな役割を果たしています。印象に残った作品を挙げてみました。

囃みころすときに

かすかに味のするあくび

遅れてひびく雷

作者 高良真実

——あくびの味、雷の音。五官と脚韻が効いている。

斜めに突き刺さった私が取れない

作者 笹生あい

——方向や動きが「私」という存在の印象を強く訴えています。

心が折れる音を聞いた

なかなかでかい音だった

作者 加藤 美紀

——心理的なものを音という実態とその量で表しました。

あの日の今日

誰かのかわりに 今、水を飲む。

作者 ベロニカ

——体感としての追悼。こういうかたちの祈り。

外は光と蝉の声に満ちていて

私は寒くて乾いた部屋にいる

幸福な幽霊みたいに

作者 春町 美月

——コロナが見せてくれる現代人のあり方。

ぼつぼつと

生きるカメにも

にじむあせ

作者 十三間

——無言の亀にも人知れぬ苦勞あり。

西瓜もぎ

子どもの頸をすげ替える

作者 西春奈

——スイカはちょうど子どもの首の重さなのか。身体感覚が見せてくれる幻想。

泣き終わったあとの

バスタブが広い

作者 うすしか

——誰もが納得のいく感覚の発見。

月の夜の喧嘩の作法教えをり

作者 亀山こうき

——定型のしとやかさの中に新鮮な思考をねじ込む。

いーよ、いーよ、いーよ

うーん……

許可と思案を繰り返す

ツクツクホーシ

作者 春町 美月

——そうか、ツクツクボウシは許可と思案をしていたのか！知らなかったなあ。

行かれましょう。

更けるまでに謳歌

浅き宵、

転がしても転がしても

作者 来栖 優

——転がされるのは我が身か賽の日か、はたまた運命か。

八月が終わる

卵に黄身ふたつ

作者 細村 星一郎

——小さな驚きに、ふいに気づく微細な宇宙の巡り。

手を上げた方も痛い

泣きながら主張するやつ

返り討ちにす

作者 式号

——言い訳、へ理屈の多い世の中を一刀両断。